

～チェルノブイリとフクシマに想いを寄せて～

「救援関西」発足33年の集い

2024年 **12月15日** (日)

午後 1:30～4:30



大阪市立総合生涯学習センター (第1研修室) 大阪駅前第2ビル5階
資料代：800円、学生・障がい者400円

プログラム

～オープニング～ <歌&ギター> アカリトバリさん

1. <事務局報告> 今年の活動を振り返り 来年に向け～ヒロシマ・ナガサキ,そして
チェルノブイリ・フクシマを結んで, ヒバクシャの人権・補償の確立を求める
2. <お話> 石井ひろみさん (福島原発事故 津島被害者原告団)
「ふるさとを返せ! 津島原発訴訟」経緯と思い
3. 質疑応答 (インタビュー形式) と討論など

原発事故後 13年半を迎えたフクシマでは、トラブル続きの廃炉作業、続く放射能汚染、強行される汚染水海洋放出、健康・医療、賠償・生活再建など課題が山積しています。しかし政府・東電は、事故の責任を取らないばかりか、事故被害などなかったかのように、医療費等減免措置の段階的廃止など被害者支援打切りを進める一方、新潟の東電柏崎・刈羽原発の再稼働準備を急いでいます。私たちはこのような政策を許してはならないと考えます。

「発足 33 年の集い」では、福島県浪江町・津島から避難を余儀なくされ自宅に帰ることのできない石井ひろみさんをお迎えしてお話を伺います。津島はかつて人々が苦勞して開墾した浪江の山間の集落。石井さんは、嫁いだ津島の家で代々受け継がれた竈門に、毎朝、火を入れるたびに「ふるさと」を感じたと言います。農作業、祭りや行事を通じて地域の人々とのつながりを大切にしながら暮らした事故前の津島。

3.11 東日本大震災に伴なう福島第一原発重大事故の発生にもかかわらず、国や東電から浪江町には汚染や避難指示に関する一切の連絡がなく、町は独自の判断での町民避難を強いられました。3月12日、人口1400人の津島は、沿岸部から8000人を超える避難町民を受け入れました。しかし、原発が次々に爆発し、放射能プルームに覆われる下で、町は3日後には津島からも避難を決断。そして、津島は高汚染の「帰還困難区域」となり、住民は未だにふるさとに帰れません。そのような中で、「津島地区福島原発 事故の完全賠償を求める会」を結成、さらに国・東電に事故の責任を問い、「原状回復」を求めて「ふるさとを返せ!」と訴訟を起こすに至った経緯、石井さんの思いや現状をお聞きします。ご参加ください!

主催：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西

<問合せ> 電話：072-253-4644(いのまた), 0797-74-6091(たなか), e-mail: cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp

石井ひろみさんのプロフィール



1949年、北海道美唄市生まれ。「転勤族」の父と共に、福岡・大阪・兵庫・東京・神奈川に転居。学生時代にアルバイト先で夫と出会う。1970年、日本体育大学女子短期大学保育科卒業、同校図書館勤務。1971年、退職して結婚、津島住民となる。2000～2004年、津島公民館館長在職。2011年、東日本大震災・福島第一原子力発電所事故で被災。2017年まで、子供宅・実家・避難所・みなし仮設・中古住宅等を経て福島市に家を立てて現在に至る。

チェルノブイリ・フクシマを繰り返すな！ 原発事故被害者の補償と人権の確立を！



私たち「救援関西」はベラルーシとロシアのチェルノブイリ・ヒバクシャと、互いに顔の見える交流を続けてきました。しかし、ロシアとウクライナの戦争が長期化する中、チェルノブイリ事故被害者との直接交流の再開の目処は立たないままです。ロシアは原発を占拠し、またウクライナ支援のNATOを牽制し、核兵器使用も辞さないとしてベラルーシへの核兵器配備を行い、新たな核惨事も危惧されています。私たちは即時無条件停戦を求めます。

私たちは、どんなに困難であろうと、今後もチェルノブイリとフクシマの友人たちと共に、事故被害者の人権・補償の確立を求め、もうこれ以上原発重大事故を繰り返させないために活動を続けます。「発足33年の集い」では、この一年の活動を振り返り、石井さんのお話、そしてチェルノブイリ事故被害者からのメッセージも受け、チェルノブイリ・フクシマに思いを致し、今後の取り組みについて話し合いました。ぜひ、ご参加下さい！

チェルノブイリ支援・交流先～ベラルーシの友人達～

首都ミンスクへの「移住者」

首都ミンスクのマリノフカ地区には、ベラルーシの高汚染地からの1万人あまりの移住者が暮らしています。人々は住み慣れた故郷を捨て、都会での「ゼロからの生活」を始めなければなりません。私たちは「移住者の会」との交流を続けています。



モギレフ州の汚染地の人々

ベラルーシ西部のモギレフ州には、原発から250km以上も離れていながら、地区の大部分が汚染され、移住と出生率低下のために人口が激減した地区があります。人々は今も放射能汚染と被曝の中での生活を続けています。慢性的な被曝と生活難のため、地区住民、特に子ども達の健康が悪化しています。私たちは病院・学校・幼稚園・子ども保護施設に支援を行ってきました。またロシアの非汚染地域にあるサマーキャンプへの、ベラルーシの子どもたちの参加も支援してきました。しかし、ロシアがベラルーシを経由してウクライナに侵攻して以降、現地訪問ができない状態が続いています。

